

黒田遺跡 2

1991

滋賀県坂田郡

近江町教育委員会

序

近江町は、豊かな自然環境に恵まれ、その肥沃な土壌の上に今日まで発展して参りました。この度報告いたします「黒田遺跡」は奈良・平安時代を中心とした遺物散布地とされてきましたが、今回の調査によって縄文時代から平安時代におよぶ複合集落遺跡であることが明らかになりました。

「黒田遺跡」をはじめ先人の残した数多くの諸遺跡は、近江町の歴史・文化を理解する上で欠くことのできない公共の財産です。これらの貴重な文化財を後世に伝えていくことは現代に生きる我々の責務といえます。

この報告が地域史研究や埋蔵文化財保護への理解と認識を深めるために幾分でも寄与することができれば幸いです。

末筆になりましたが、この調査に御協力いただきました関係企業・関係諸氏・関係諸機関に厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

近江町教育委員会

教育長 木田源三郎

例 言

1、本書は、滋賀県坂田郡近江町内における工場地造成工事に伴う埋蔵文化財（黒田遺跡）の発掘調査の報告書である。

2、発掘調査は平成2年度に実施し、同年度に整理調査を実施した。

3、調査は株式会社辰誠建設の依頼により、近江町教育委員会が実施した。調査の体制は下記の通りである。なお、調査経費は株式会社辰誠建設が負担した。

調査主体	近江町教育委員会	教育長	木田源三郎
調査事務局	近江町教育委員会	社会教育課	課長 須戸 茂樹
		係長	世森 増信
		主任	宮崎 幹也

調査補助員 南 孝雄（現・京都市埋蔵文化財研究所）、中川治美（中京大学学生）
橋本和恵（滋賀大学学生）

発掘作業員 広瀬清左エ門、村岡勝次、北居憲治、近藤喜美子、吉居靖子
小原八重子

4、本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言を得た。記して厚く感謝の意を表する次第である。

江谷 寛、田中勝弘、中井 均、中川通士、吉田秀則、細川修平、古野四郎
粕淵宏昭、浜口和弘、前川佳代（順不同、敬称略）

5、発掘調査および整理調査にあたっては下記の団体の協力を得た、記して謝意を表する。

中原工務店（発掘機械）、株式会社イビソク（空中写真測量）、有限会社真陽社（報告書）

6、本書で使用した方位は新平面直角座標系Ⅵによった。また標高はTP（東京湾平均海面高度）を用いた。

7、本書の執筆・編集は宮崎幹也がおこなった。

目 次

第1章	はじめに	1
第2章	遺跡の位置と環境	4
第3章	検出した遺構	7
第4章	出土した遺物	9
第5章	ま と め	15

挿 図 目 次

第1図	黒田遺跡位置図	2
第2図	周辺の弥生・古墳時代集落遺跡分布状況	3
第3図	調査地位置図	5
第4図	第2次調査区検出遺構	6
第5図	S B01遺構平面図	8
第6図	S D01出土遺物（1）	9
第7図	S D01出土遺物（2）	10
第8図	S D01出土遺物（3）	11
第9図	S D01出土遺物（4）	12
第10図	S D01出土遺物（5）	13
第11図	その他の遺物	14
第12図	黒田遺跡検出遺構相関図	16

図 版 目 次

- 図版 1 調査地空中写真
- 図版 2 (上) 調査前状況 (南より)
(下) 調査開始状況 (南より)
- 図版 3 第2次調査区空中写真
- 図版 4 (上) 調査区全景 (南東より)
(下) 調査区全景 (東より)
- 図版 5 (上) S D 01 (南東より)
(下) S D 01 (南より)
- 図版 6 (上) S B 01 (南東より)
(下) S B 01 (南西より)
- 図版 7 (上) S B 01周辺 (北西より)
(下) S B 01周辺 (南西より)
- 図版 8 (上) 矢板検出状況 (北西より)
(下) 矢板検出状況 (北西より)
- 図版 9 出土遺物
- 図版 10 出土遺物
- 図版 11 出土遺物

第1章 はじめに

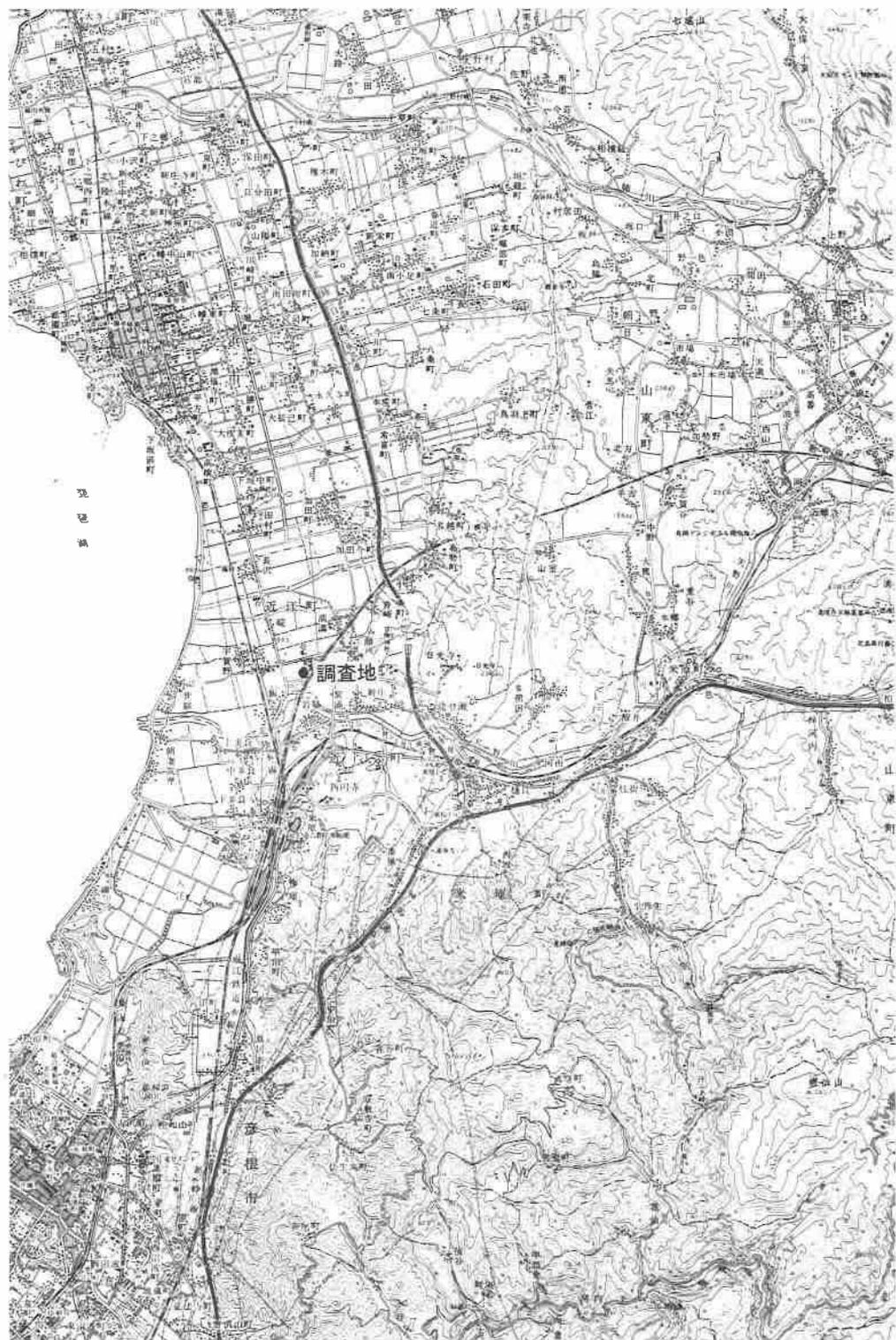
ここに報告する黒田遺跡は、滋賀県坂田郡近江町大字箕浦字黒田から大字顔戸字柳町を中心に所在しており、これまで奈良・平安時代の遺物散布地として周知されてきた。近江町の南部には一級河川「天野川」が東西に走り、河口まで約2kmの同右岸の沖積平野に同遺跡は立地する。黒田遺跡の標高は海拔91m前後であるが、これは約2,0km西に位置する琵琶湖の平均水面（84.371m）と僅か7m弱の比高差を示す。

この遺跡は昭和60・61年度に実施した近江町内遺跡分布調査によって新しく発見された遺跡であり、1987年に近江町教育委員会が発行した『近江町内遺跡分布調査報告書』に初めて記載されている。同報告書によると、黒田遺跡からは須恵器・灰釉陶器・奉養銭等が表面採集されており、同遺跡を奈良・平安時代の遺物散布地として扱っている。この遺跡については、近年に至るまで発掘調査等の機会がなく、遺跡の性格については不明な点が多かった。しかしながら、国道8号線バイパス計画路線に隣接することもあり、平成元年度以降農地転用による造成工事が頻発し、これに伴い黒田遺跡の試掘調査や発掘調査が次第に実施されるようになった。これらの調査成果から、現在では黒田遺跡は縄文晩期・古墳時代前期・平安時代前期の3時期を中心とした複合集落遺跡であると判明している。

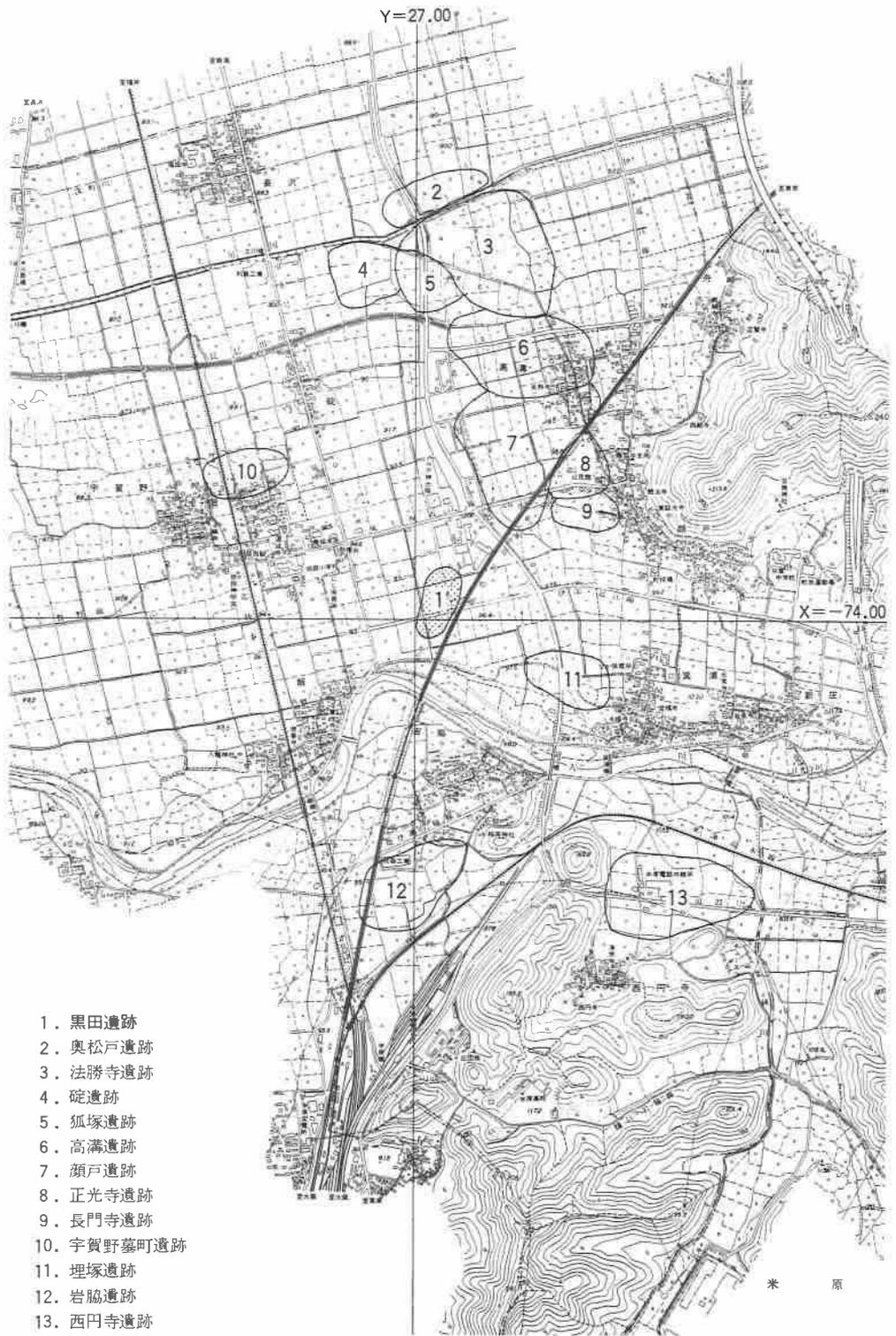
今回の発掘調査の対象地は黒田遺跡の北西部の一角にあたり、国道8号線バイパス建設予定地の西隣で、県道世継・多和田線の北側にあたる。この調査は黒田遺跡の第2次調査に該当し、工場地造成工事に関連したものである。この調査では、試掘調査によって地下遺構への影響が予測された箇所約1,000㎡を対象として発掘調査を実施した。また先に実施し『近江町文化財調査報告書第12集 黒田遺跡』で報告した黒田遺跡第1次調査箇所とは南北に隣接した位置関係にあり、今回の調査は第1次調査区の北側を調査したことになる。

当該調査の調査地は滋賀県坂田郡近江町大字顔戸字柳町1045・1047・1048・1049に該当し、本調査以前は水田であった。

また本調査は株式会社辰誠建設の依頼により、近江町教育委員会が実施したもので、平成3年3月4日より3月19日まで発掘調査を実施し、平成3年3月30日まで整理調査を実施した。



第1図 黒田遺跡位置図 (S = 1 : 100,000)



1. 黒田遺跡
2. 奥松戸遺跡
3. 法勝寺遺跡
4. 碓遺跡
5. 狐塚遺跡
6. 高溝遺跡
7. 顔戸遺跡
8. 正光寺遺跡
9. 長門寺遺跡
10. 宇賀野墓町遺跡
11. 埋塚遺跡
12. 岩脇遺跡
13. 西田寺遺跡

第2図 周辺の弥生・古墳時代集落遺跡分布図

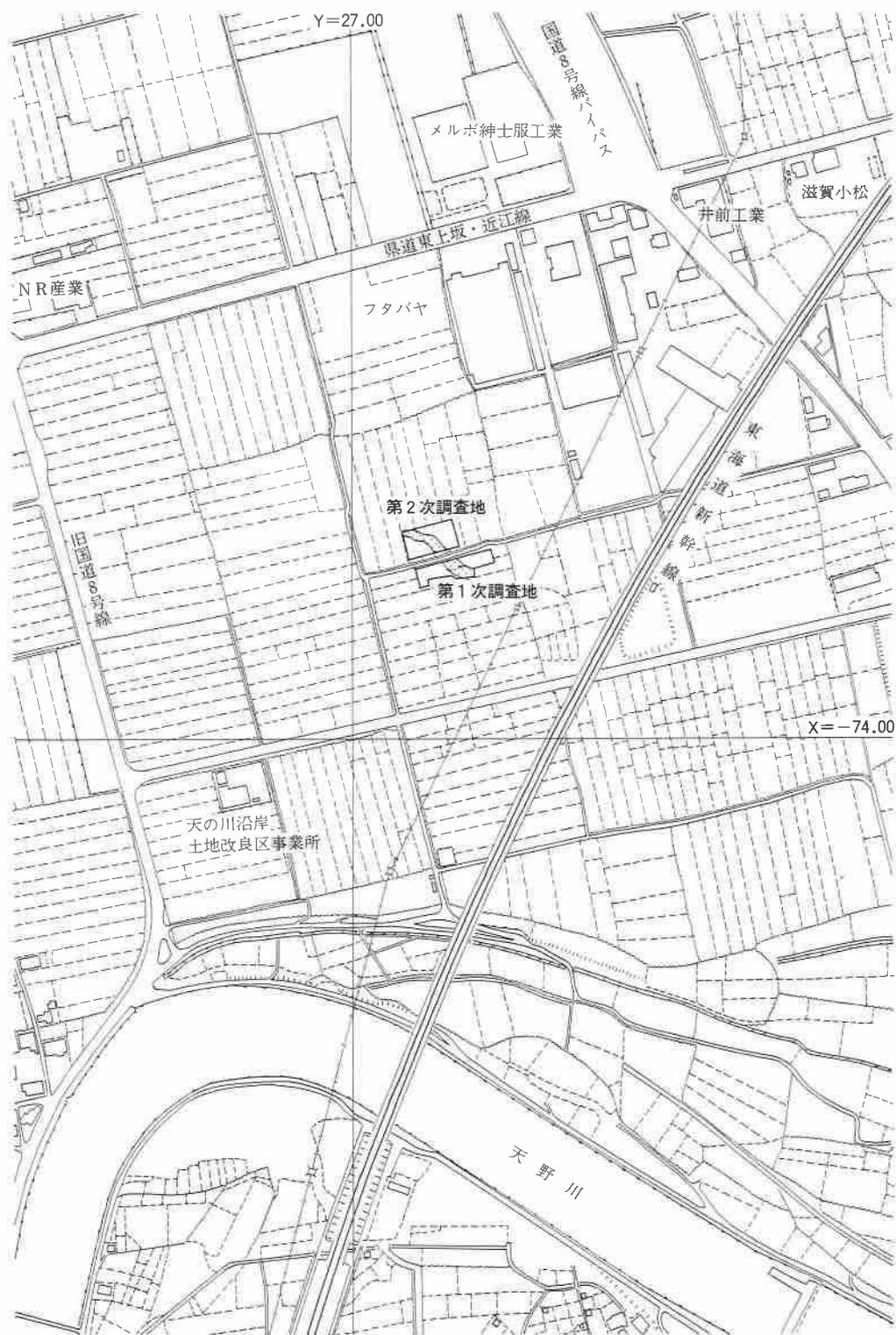
第2章 遺跡の位置と環境

滋賀県坂田郡近江町は、琵琶湖の北東縁部に位置する小さな町で、西部は琵琶湖と接し、東部は横山丘陵と接している。JR米原駅の北端から北東に伸びる近江町は、米原町に南接する他、長浜市に北接する。町内の地勢は先に述べたとおりであるが、湖岸部を中心としてアルファベットのL字形に平野部が広がっている。この平野部には長浜市側より湖北地域一円に共通する条里景観が認められる。条里景観は、町内の数個所で細かい乱れが認められるが、ここに報告する黒田遺跡周辺では安定した様相を呈しており、南方約2kmの一級河川「天野川」周辺で、ようやくその施行に乱れが認められる。

黒田遺跡は町内のほぼ中央にあたり、近江町役場の西方約800mに位置する。遺跡は、天野川の形成する右岸の沖積平野に立地する。過去に実施された発掘調査から、黒田遺跡は弥生時代の終末期から古墳時代前期を中心とした遺跡であることが知られているが、同時期の町内遺跡分布を示したのが第2図である。町内の最北部には多数の遺跡が密集しているが、奥松戸遺跡（弥生時代後期）・法勝寺遺跡（弥生時代中後期）・碓遺跡（古墳時代後期）・狐塚遺跡（弥生時代後期および古墳時代後期）の4遺跡は「法勝寺遺跡群」と呼ばれ、条里景観の及ばない範囲に集中している。これらの遺跡は平安時代後期の荘園開発によって共に削平されている。調査によって検出された遺構の多くは方形周溝墓で構成される首長墓群であり、弥生時代中期中葉に始まり、同終末期に衰退する。一部には前方後方形を呈するものも認められ、これまでに発掘調査によって検出されて周溝墓は100基を超えている。

この法勝寺遺跡群の南側に隣接する高溝遺跡（古墳時代前中期）・顔戸遺跡（弥生時代終末期および古墳時代前中期）・正光寺遺跡（古墳時代前期）・長門寺遺跡（弥生時代後期）の4遺跡は「顔戸遺跡」と呼ばれ、条里景観の普及する箇所に集中している。これらの遺跡は平安時代に実施された条里開発によってともに削平されているが、「環濠」とみられる大溝周辺に形成された居住区が確認されている。これらの遺跡群のうち墓域は南部に集中しており、近年の調査によって長門寺遺跡から方形周溝墓が確認されている。

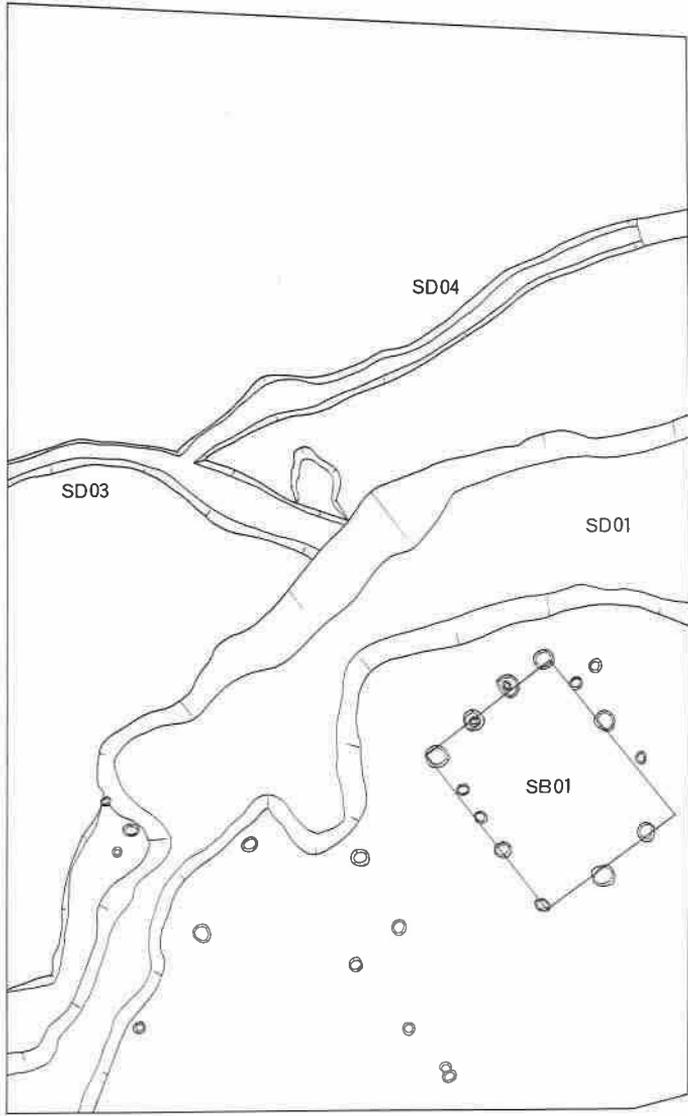
顔戸遺跡群の西方1kmには、弥生時代中後期の宇賀野墓町遺跡が存在する。これまでに実施された発掘調査では遺物の出土が知られるものの、具体的な遺構は検出されていない。黒田遺跡の東方500mには弥生時代後期の墓域である埋塚遺跡の存在が知られる。先の長門寺遺跡と、この埋塚遺跡の間には大きな沼沢地の痕跡が認められており、この沼沢地の南北縁部には共に方形周溝墓によって構成される首長墓域が存在していたようである。こ



第3図 調査地位置図

X=-73.840

X=-73.860
Y=27.080



Y=27.060



Y=27.040

第4図 第2次調査区検出遺構

の他天野川の左岸には、岩脇遺跡（弥生時代中後期）・西円寺遺跡（弥生時代後期および古墳時代前期）の存在が知られる。岩脇遺跡については、これまでに発掘調査の例が無く、実態については不明であるが、一方の西円寺遺跡については首長墓を備えた環濠集落であることが知られている。この遺跡で確認された環濠は、集落の北側で幅17m・深さ3mを測る大規模なものであり、環濠内の東部に方形の竪穴住居で構成される居住区が確認されている。一方、環濠内の日の西部では周溝墓が連立する首長墓域が存在する。円形・方形・帆立貝形の周溝墓で構成されるこれらの墓は、弥生時代終末期から古墳時代中期にまで及ぶ。中でも弥生時代終末期の円形墓は、法勝寺遺跡検出の前方後方形周溝墓に後出するもので、旧坂田郡内における古墳出現前期の墓制を知る上で極めて重要な遺構とされる。このように黒田遺跡の周辺には、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とした集落遺跡が多数分布している。

第3章 検出した遺構

ここに報告する黒田遺跡の第2次調査区は、先に実施した第1次調査区に北接しており、共通する遺構が検出された。南北25m・東西40mの調査区内からは、3条の溝（SD01・SD03・SD04）と1棟の掘立柱建物（SB01）が確認された。また第1次調査区で検出された溝SD02は確認されなかった。各検出遺構の内容は、以下のとおりである。

SD01

調査区内を斜め方位に伸びる溝状遺構である。基底部の標高差から、北西から南東方向に向かって伸びるものと判断されるが、この方位は琵琶湖の向かう平野部の現行水利形態と逆行している。遺構の規模は、北西部で幅2m40cm・深さ40cm、南東部で幅6m90cm・深さ60cmを測る。遺構の断面形状は緩やかなU字形を呈しており、基底部は水平にちかい状態である。

遺構の北西端部において、SD01内矢板で仕切られた箇所が検出された。矢板の施行方向は現行の水田地割に合致しており、SD01本来の機能に伴うものではなく、遺構上層に形成された後世の水田に関連するものと判断された。

遺構内の遺物包含状況は、中央から南部にかけて集中しており、北部で稀薄な状態となる。これらの遺物は、遺構の縁部から多く出土しており、遺構中央部からの出土は少ない。この遺構は本来の規模を再三変更しており、西側の一部が埋もれた状態で掘立柱建物SB

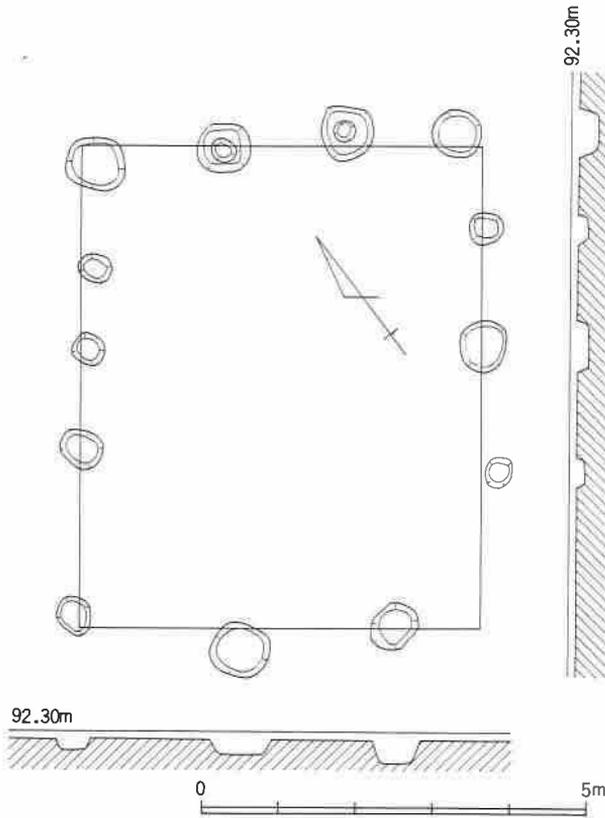
01が構築されている。また北部の形状についても、埋設後の縮小化が確認されている。

SD03

SD01の中程につながる北部から伸びる溝。幅80cm～1 m 80cm・深さ15cm～40cmを測る。遺構は緩やかに屈曲しており、上部が削平される。基底部の標高差から南流していたものと判断される。遺構内の土層堆積は、暗灰褐色粘質土の単層で構成されるが、一部基底部に細砂の堆積が認められる。

SD04

SD03の中ほどから南東方向に伸びる遺構。幅90cm・深さ20cmを測る。SD03との関係が、重層関係にあるものか、接続関係にあるものか明らかにされなかった。遺構の基底部分には標高差が無い。



第5図 SB01遺構平面図

SB01

SD01の西側で検出された掘立柱建物。主軸を南北方位から大きく傾けている。桁行4間（6 m 50cm）、梁行3間（5 m 10cm）を測る。

柱穴の状況は東西で幾分異なり、東半部が比較的規則正しく配列するのに対し、西半部では柱穴の配列が不整列である。また東半部では、柱穴と掘り方の分離が明瞭であり、一部には土器の出土が認められる。

SB01の北西側には柵列状の柱穴が確認されており、主軸方位の共通性から共存の遺構と判断される。

第4章 出土した遺物

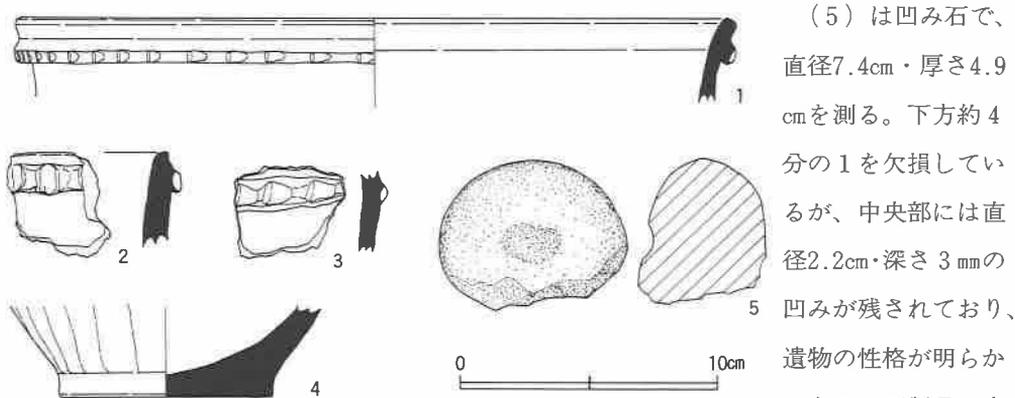
黒田遺跡第2次調査区からは、石器、土器（縄文式土器・弥生式土器・古式土師器）、自然遺物（種子）、骨（獣骨）等が出土した。これらの遺物の多くはSD01より出土した。その内容については以下に報告する。

SD01出土遺物

SD01から出土した遺物は、整理用のプラスチックコンテナバットに約10箱相当量であり、その大半は古墳時代初頭期の古式土師器であり、一部に若干量の縄文式土器が含まれる。縄文式土器は約60点程確認されているが、いずれも細片であり、全容の明らかなものは無い。第6図に示したものは、縄文式土器と石製品である。

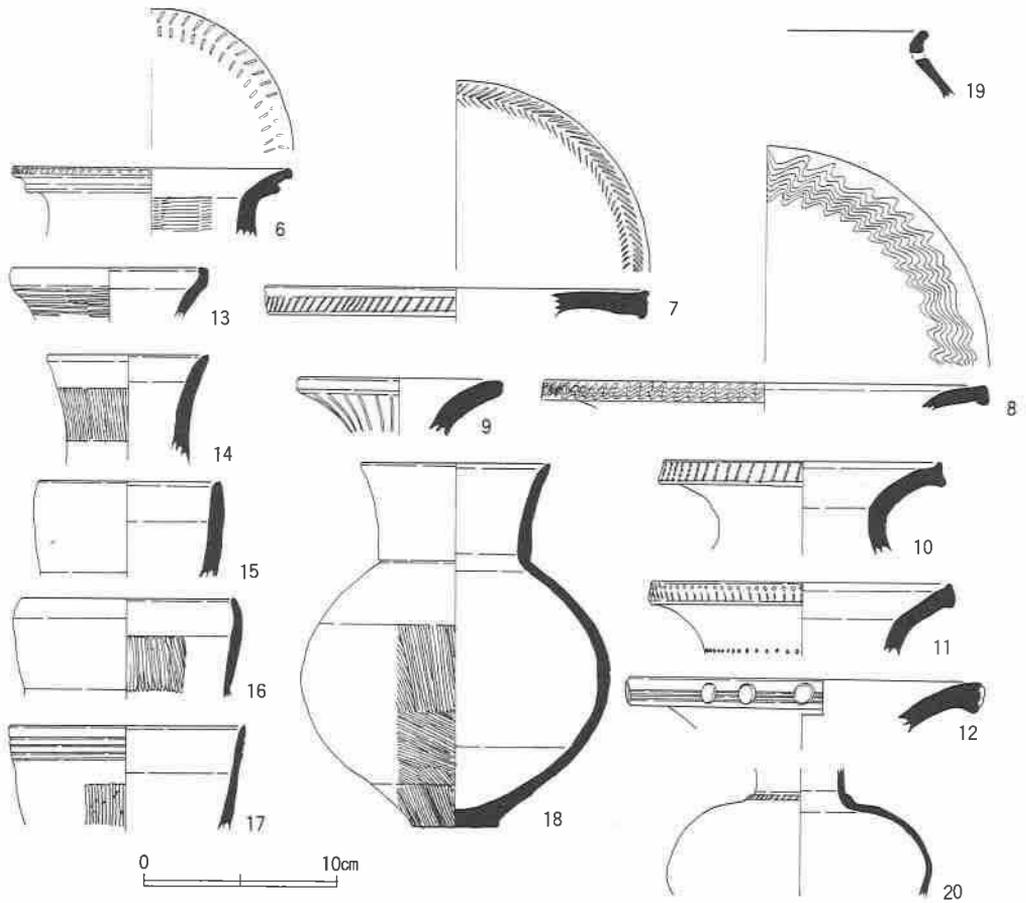
(1・2・3)は、いずれも晩期後葉の突帯文系土器である。約20点の同器種の内、口縁部の口径が明らかなものは(1)のみで、27.6cmを測る。(1)は口縁部のやや下方に突帯が回り、右方向に刻み目が施される。口縁部の上端は面をもって終わる。(2)もまた口縁部で、幅の広い突帯が回り、刻みの押圧が認められる。口縁部の上端には面を持たず、僅かに外反する。(3)は口縁上方から2段目の突帯で、体部の最も張り出た箇所に戻る。この突帯のも右方向の刻み目が施される。以上3点の遺物から、縄文時代晩期後葉の「船橋式」併行期のものと推定される。

(4)は深鉢のものと思われる底部である。底径8.4cmを測り、平底を呈する。器壁は大変肉厚であり、体部外面にへら削りの痕跡が認められる。また底部には圧痕等一切確認されていない。



第6図 SD01出土遺物(1)

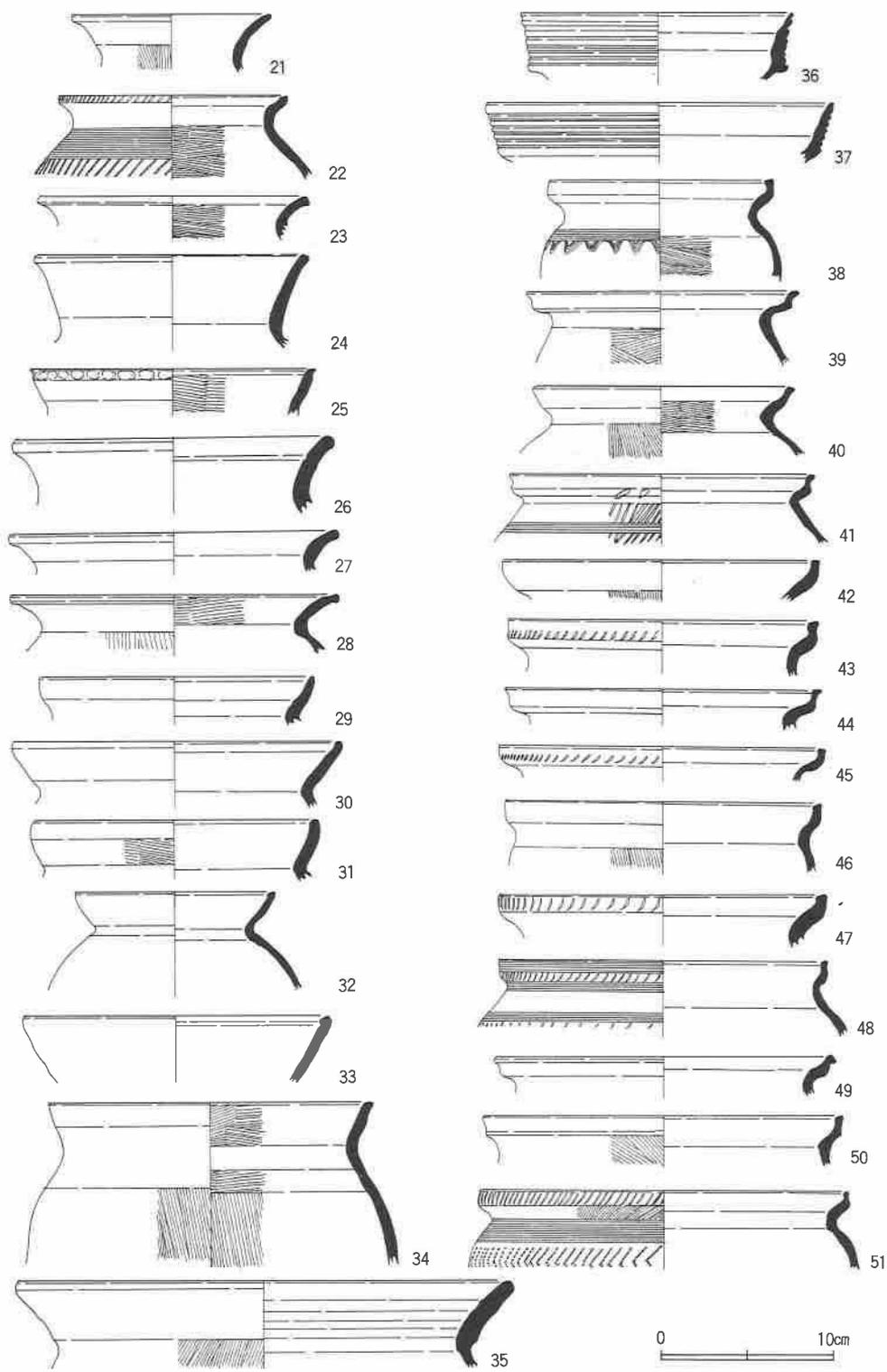
(5)は凹み石で、直径7.4cm・厚さ4.9cmを測る。下方約4分の1を欠損しているが、中央部には直径2.2cm・深さ3mmの凹みが残されており、遺物の性格が明らかである。石製品の出土は1点のみである。



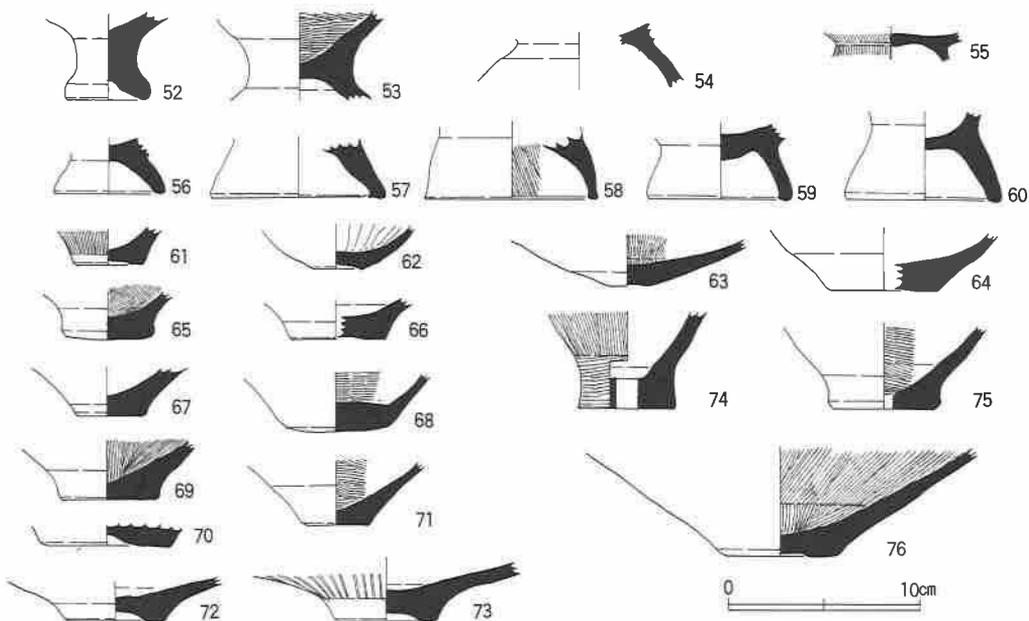
第7図 SD01出土遺物(2)

SD01から出土した土器のうち弥生式土器および古式土師器については第7図から第10図に示したとおりである。このうち主体となるものは古式土師器であり、先行する弥生式土器が若干量混在する。遺物には壺(6~20)・甕(21~50)・鉢(51)・脚台部(52~60)・底部(61~76)・高杯(77~99)・器台(100~109)が含まれる。

壺には、大別して口縁部の外反するものと、直立するものがある。口縁部の外反するものには(6~12)がある。(6)は直立する口縁部が上端で外反するもので、口縁部のやや下方外面に一条の突帯をめぐらせており、口縁部の上端と内面上方に刺突文が施される。(7)は上方で外方に大きく伸びる口縁部をもつ。口縁部の外面と口縁部内面上方には刺突文が丁寧に施される。それに対して(8)では同様の箇所に波状文がみとめられるが、こちらは大変粗雑な施文である。(10~12)は口縁部が大きく外反しないタイプで、口縁端部が上方に肥厚するもの(10・11)と、下方に垂下するもの(12)がある。(10)は口縁部の内面上端にナデ調整が残り、口縁部の外面に刺突文が施される。(11)は屈折して外反する



第 8 图 SD01出土遺物(3)

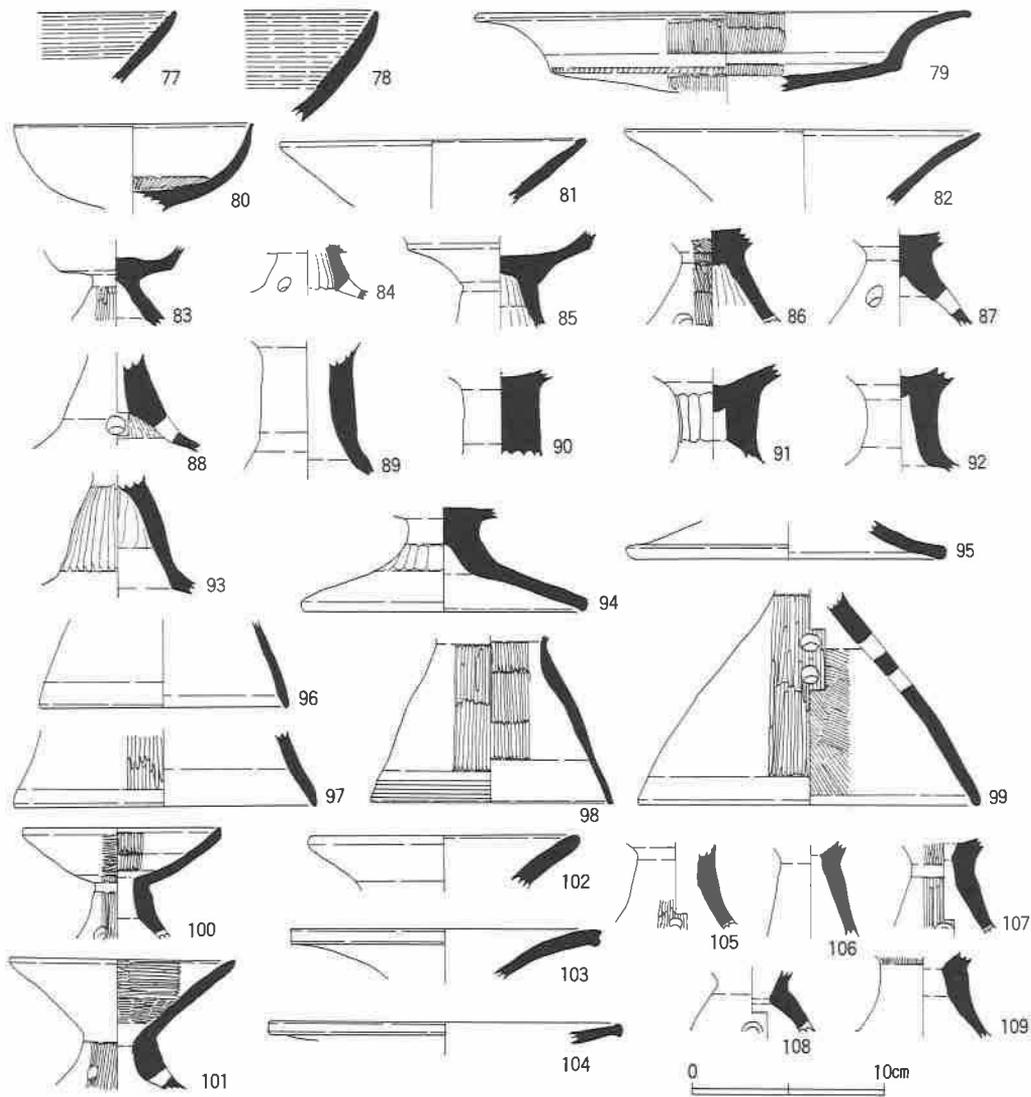


第9図 SD01出土遺物(4)

口縁部を持ち、口縁部上端面と頸部に刺突文が施される。(12)は口縁部外面に櫛描直線文が施され、その上部に円形浮文がつく。

一方口縁部が直立する傾向のものには(13~20)がある。このうち(13)は弥生時代中期の受口状口縁壺で、頸部外面に粗いハケが残る。(14・18)は所謂「退化長頸壺」のながれを引くもので、近江地方に多い弥生時代後期の壺である。体部の上方には施文等残されていない。(15~17)は口縁部が直立する壺で、口縁上端部の丸いもの(15)、内弯するもの(16)、直線的に伸びるもの(17)がある。(20)は器壁の薄い土器で、扁平な球形の体部を備え、体部と頸部の接点に突帯を回らせる。

次に甕を大別すると、口縁部の外反するもの(21・23~35)、受口状になるもの(22・36~51)が存在する。(21)は体部のやせた甕で、口縁部の外面をナデ調整し体部外面にハケが残る。(23・24)は口縁部が緩やかに外反し上端に面をもつ。(25)は口縁部の内面にハケを残し、外面の上端に圧痕がめぐる。(26)は器壁の厚い甕で、内面に一条の凹線を回らせている。(27・28)は強く外反する短い口縁部をもつ。(27)はナデ調整され、(28)は口縁部内面と体部外面にハケを施す。(29~33)は内弯気味に立ち上がる口縁部をもつ。(30)は口縁部の上端を内側に屈曲させる。(32・33)は口縁部の上端を内側に肥厚させる布留式土器の甕である。(34)口縁部が緩やかに外反する甕である。体部内外面と口縁部内面にハケが施される。(35)は口径28cmを測る大形の甕である。口縁部の器壁が厚く、体部外面にハケを施す。(36・37)は口縁部の外面に擬凹線が回る日本海系の甕である。



第10図 SD01出土遺物(5)

(38~50) は受口状口縁をもつ甕。(38) は口径12.8cmを測る中形の土器。口縁部の上端は直上に短く立ち上り、内面に肥厚させている。体部外面の上方には楯描の直線文と波状文が回り、内面にはハケが施される。(39) は口縁部の上端を外方に屈折させている。体部外面には粗いハケが施される。(40) は頸部が緩やかに屈曲する甕で、その箇所のみ内面に肥厚し肉厚の形状を示す。(41) は短く屈曲する口縁部をもつ。口縁部外面には刺突文が回る。体部外面には粗いハケが残り、上部より楯描直線文が施文されている。(42) は内弯気味の肉厚な口縁部を伴う。頸部より下方の外面にハケが残る。(43) は短く立ち上がる口縁部を持ち、上端を内外方に肥厚させている。口縁部の外面には刺突文が回る。(44) は器壁

が薄く、口縁部の上端を外方に伸ばす。外面の施文は無い。(45)は内弯気味に立ち上がる短い口縁部をもち、外面に刺突文を回らせる。(46)は緩やかに屈曲しながら上方に伸びる口縁部をもち、体部外面にのみハケを残す。(47)は肉厚の器壁をもち、短く立ち上がる受口状口縁の外面に刺突文を残す。(48)は器壁の薄い土器。口縁部は緩やかに屈曲し、上端部を丸く終える。口縁部および体部の外面には、櫛描の直線文と刺突文が交互に施文される。(49)はきつく屈曲する口縁部を持ち、上端を外方に肥厚させる。(50)は屈曲する口縁部にきつい稜線を伴い、頸部下半の外面にハケを残す。

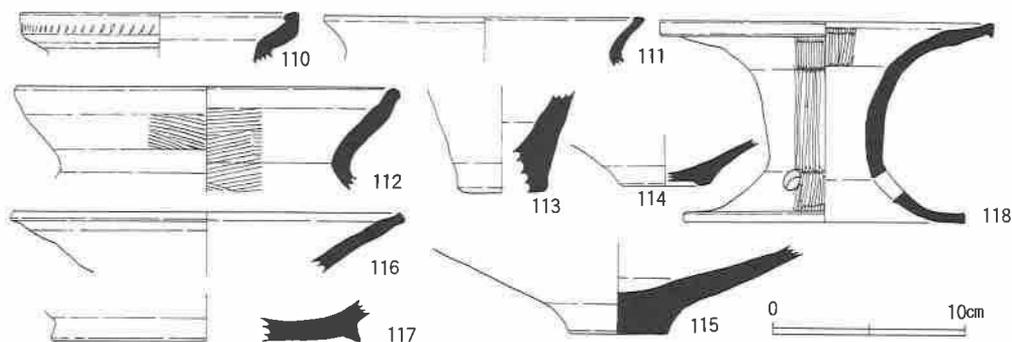
(51)は受口状口縁を持つ鉢。丸味をもつ肩部が特徴的である。口縁部の一部にはハケが残り、上部から刺突文が回る。また体部の上半にのみ施文されるのも特徴である。

(52~60)は台付甕の脚台部である。底径の小さなもの(52・56)から大きなもの(57~60)まで多様である。(61~76)は、壺・甕・甑の底部である。(74・75)は底部の中央に穿孔をもつ甑の底部である。(74)は外面に、(75)は内面にそれぞれハケを施す。

(77~99)は高杯。(77・78)は口縁部の内面が肥厚しており、擬凹線が回る。(79)は直線的に伸びる受部と外弯する口縁部から構成される。内外面ともに粗い篋磨きが施され、口縁部と受部の接点に刺突文が回る。(80)は内弯気味に立ち上がる杯部をもつ。受部の内面にのみ篋磨きが施される。(81・82)は口縁部が直線的に伸びるのが特徴。(83・84)は小振りの高杯。屈折箇所が鋭角的である。(94)は器高が低く、肉厚で大きく開く脚部をもつ。

(96~99)は大形高杯の脚部。外面に篋磨きの施されるものが多い。(100~109)は器台。(100)は小形品で、内弯気味に立ち上がる受部をもつ。内外面ともに篋磨きされる。(101~104)は外反気味に伸びる受部をもつ。(101)の一部にのみ篋磨きが認められる。(105~109)は器台の脚部である。

この他にSD01からは、骨(獣骨)・種子(モモ・トチ等)が出土している。



第11図 その他の出土遺物

その他の出土遺物

S D01以外の包含層等からも遺物の出土が認められている。(110)は受口状口縁をもつ甕。器壁が肉厚で、屈曲後に短く立ち上がる口縁部が上端で内方に肥厚する。口縁部の外面には刺突文が回る。(111)は口縁部の上端を内面に肥厚させる甕。(112)はやや大形の壺。口縁部の内外面にハケを施す。(113・115)は壺の底部、(114)は甕の底部である。(116)は器台の杯部。口縁部外面の上端にナデ調整が認められる。(117)は高杯の杯部。(118)は器台。外面と内面上方に篋磨きを残す。このうち(112)のみ掘立柱建物の柱穴掘り方より出土し、その他は包含層中より出土した。

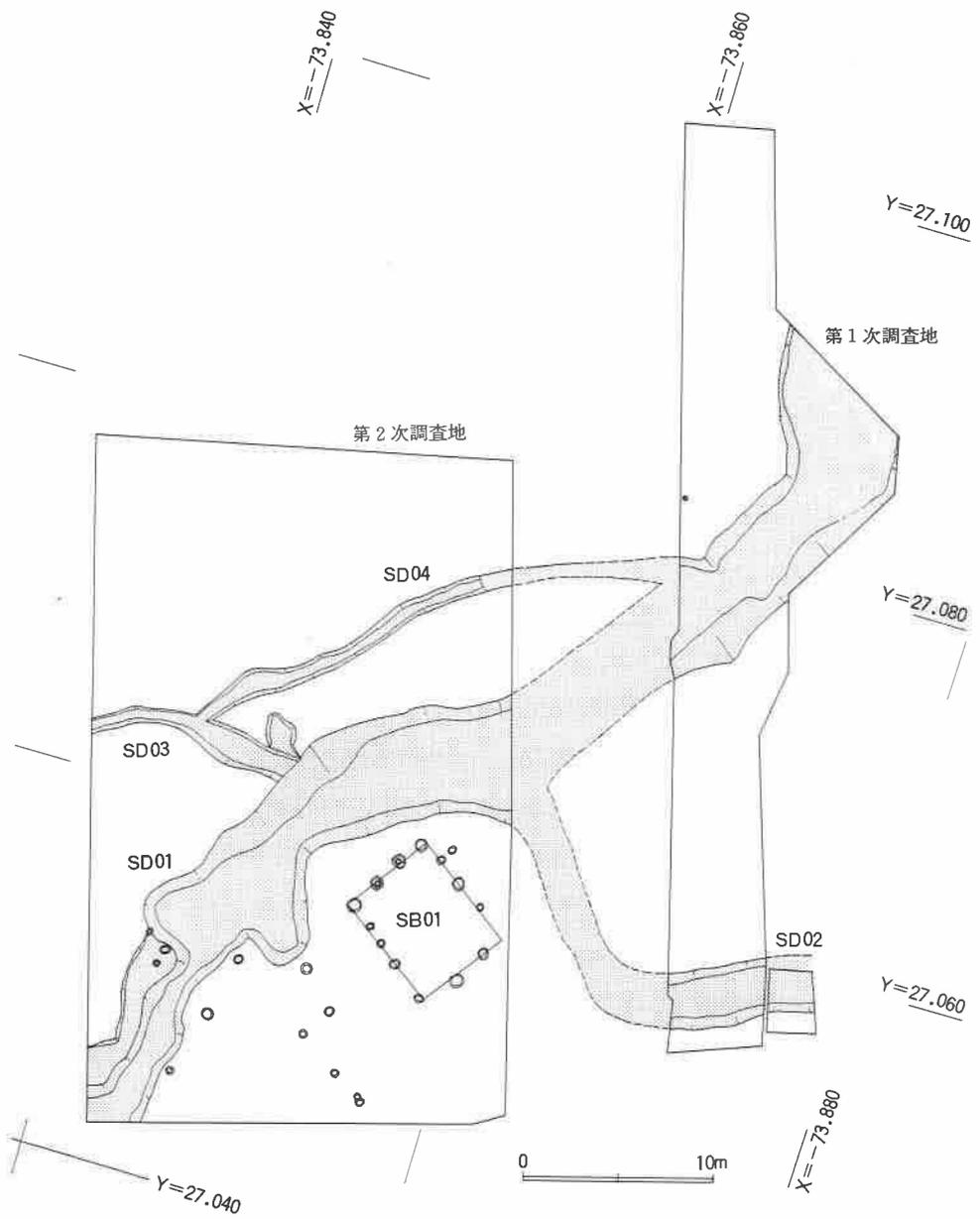
第5章 ま と め

黒田遺跡第2次調査の概要については既に述べたとおりである。過去2回の調査によって明らかにされた検出遺構の相合関係を示したものが第12図である。2つの調査区にまたがる溝状遺構S D01は、その基底部の標高差から理解すると北西より南東方向に伸びる遺構と判断されるが、これは琵琶湖に向かう現行水利と逆行しており、その解釈については今後の隣接地の調査結果を待たねばならない。先の第1次調査で検出されていた溝状遺構S D02は、今回の調査で検出されておらず、大きく屈曲することが予測される。先の調査では出土遺物から、両遺構(S D01・S D02)の年代観は近似しており、第2図では調査区の間で接続するものとして復原を試みた。

S D01の出土遺物は、縄文式土器・弥生式土器・古式土師器で構成されているが、主たる遺物は古墳時代前期の古式土師器である。これは同時期に遺構が最も活発に使用されていたと年代を示すものとされよう。また縄文時代晩期後葉と弥生時代中期の遺物が混在していることから、これらの時期の遺構も又、近隣に存在するものと推測される。

次に掘立柱建物S B01は、溝状遺構S D01の一部を埋めた上に構築されており、古墳時代前期以降の遺構であることは明らかである。しかしながら、遺構の構築年代を示す確かな根拠は無く、遺構の主軸方位から条里施行以前のものとして判断されるに過ぎない。今後の周辺地域の調査によって明らかにされるのを待ちたい。

このように黒田遺跡については、縄文時代晩期後葉に出現し、幾分低湿な土地に稲作開始直前の集落が形成されたことが判明した。同遺跡は弥生時代中期後期を経て、古墳時代中期までに大がかりな集落に変貌し、集落内の溝状遺構S D01において小形の壺や丹塗り



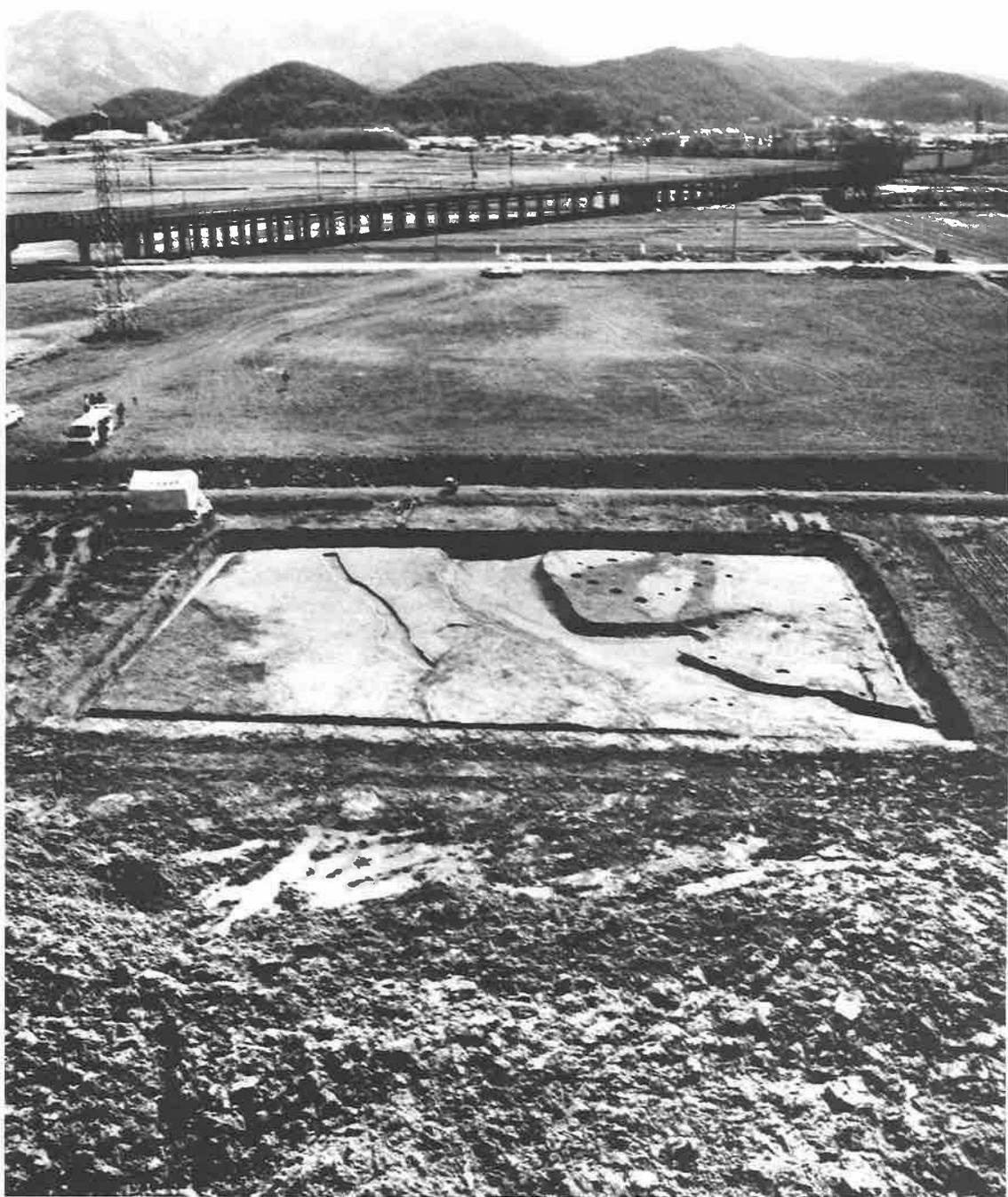
第12図 黒田遺跡検出遺構相関図

の壺を用いて水際の祭祀がおこなわれてたと推測され、出土した土器とモモ等の種子がこれを物語っている。集落遺跡の構成要素は奈良・平安時代に掘立柱建物の採用をもって大きく変化するが、同時にこの事象は統一条里の普及の遅れを指摘する結果となっている。

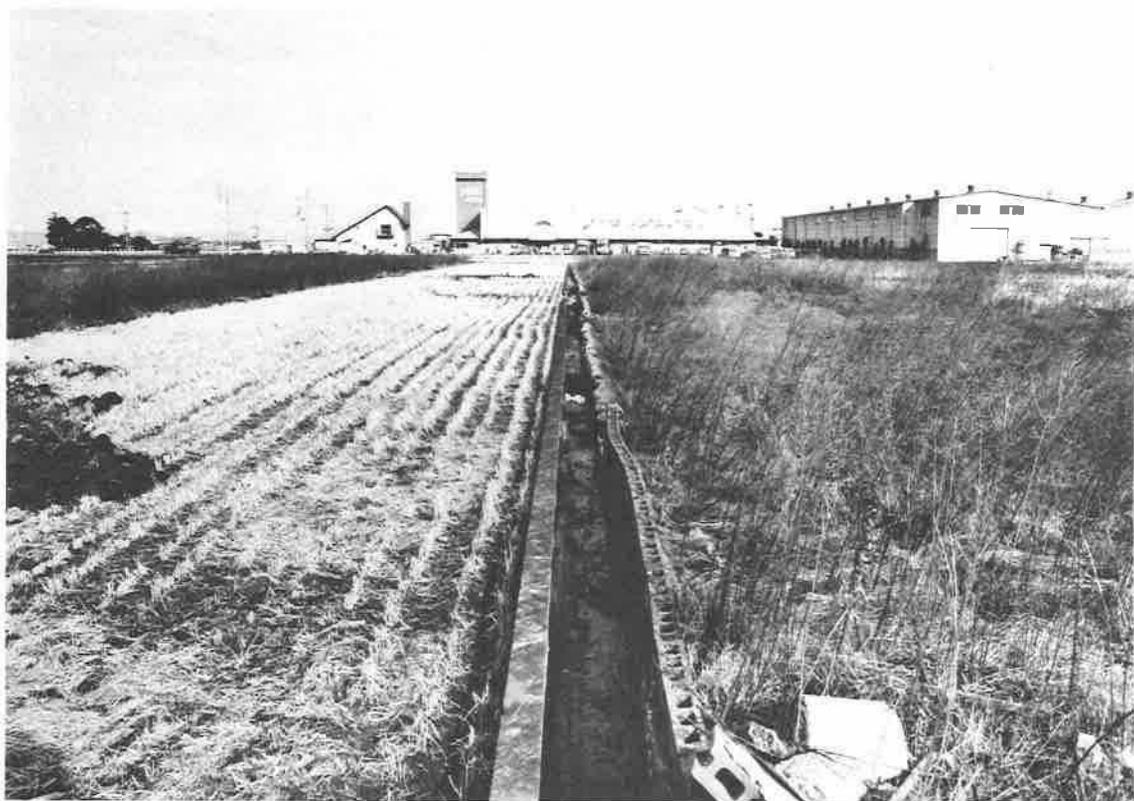
いずれにせよ過去2回の発掘調査は、複合集落遺跡「黒田遺跡」の実態を少しずつ我々に伝える結果を生んでおり、今後の調査によってより一層の進展が望まれよう。

なお末筆になったが、調査に際して御協力をいただいた方々に、深く謝意を表する次第である。

版 图



調査地空中写真



調査前状況（南より）



調査開始状況（南より）



第2次調査区空中写真



調査区全景（南東より）



調査区全景（東より）



SD01 (南東より)



SD01 (南より)



SB01 (南東より)



SB01 (南西より)



SB01周辺 (北西より)



SB01周辺 (南西より)



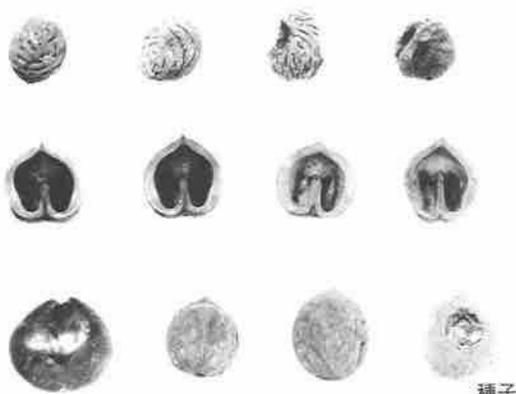
矢板検出状況（北西より）



矢板検出状況（北西より）



5



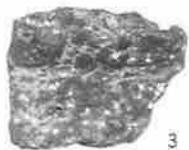
種子



1



2



3



4



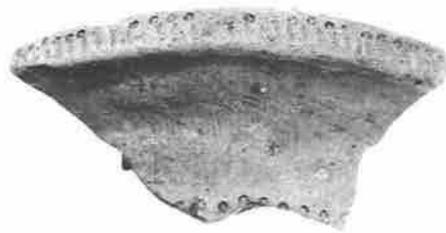
骨



10



12



11



7



20



17



10



6



38



41



54



39



46



34



37



36



17



76



75



74



近江町文化財調査報告書第13集

黒田遺跡 2

1991年3月

編集
発行

近江町教育委員会

住所 滋賀県坂田郡近江町顔戸488-3

電話 0749-52-3111

印刷 有限会社 真陽社

住所 京都市下京区油小路通仏光寺上ル

電話 075-351-6034